St. Luke's International University Repository

Development of an e-Learning Program for the Community and Supporting Student Health Volunteer: Process of the Development.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田代, 順子, 長松, 康子, 大森, 純子, 菱沼, 典子, 松谷, 美和子, 及川, 郁子, 麻原, きよみ, 平林, 優子, 酒井, 昌子, Tashiro, junko, Nagamatsu, Yasuko, Omori, Junko, Hishinuma, Noriko, Matsutani, Miwako, Oikawa, Ikuko, Asahara, Kiyomi, Hirabayashi, Yuko, Sakai, Masako メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00014995

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

―― 資 料 ――

Web上でのヘルス・ボランティア学習とボランティア学生学習支援プログラム開発：開発過程

田代順子[1)]，長松康子[1)]，大森純子[1)]
菱沼典子[1)]，松谷美和子[1)]，及川郁子[1)]
麻原きよみ[1)]，平林優子[1)]，酒井昌子[2)]

抄　録

日本において，ボランティアが文化となりつつあり今日，看護学生が地域の健康・福祉領域でボランティア活動をしている。研究者らは平成14～16年度に学生ボランティアの学習ニーズと学習支援のあり方を研究し，ボランティアの出会いからボランティア活動までの系統的な学習支援指針を作成した。平成17年から，Webでのボランティアに関する学習とボランティア学生のための学習の支援プログラム開発を開始し，平成19年1月に完成した。開発したWebの試用と評価の段階に至ったので，開発過程を中間報告として報告する。本研究の全体目的は，看護学士課程の学生が市民あるいは看護職として，都市部地域でのボランティアに関しての学習ができ，ボランティア学生が活動を通して学習ができるWeb上の学習プログラムを開発し評価することである。本研究の方法は，開発過程にコンピュータープログラム開発会社と，開発の各過程にボランティア学生を加え活動したので，アクション・リサーチ（Morton-Cooper, 2000）の研究技法を参考にして記述した。結果，2年間の開発過程は，3つの段階に分類できた。第1段階の，Webの全体設計をする段階では文献検討を行い，研究者間でボランティアの定義と要素の共通理解を行い，ボランティアを始める前の基礎学習，ボランティア準備学習，そして，ボランティア活動を通じての学習の支援プログラムとして，Webを一般サイトとボランティア学生用のコミュニケーションサイトでデザインにした。第2に「ボランティア」の知識提供のe-ラーニングのデザインと学習コンテンツ開発の段階で学生の意見を反映して作成した。第3にボランティア学生の経験からの学習支援として，活動の日誌を書き，振り返り，学生や教員との情報の共有で経験から学ぶ「サービス・ラーニング」サイトを開発した。

今後，学生の試用と教員としてのコミュニケーションから学習支援の点から評価してゆきたい。

キーワード：ヘルスボランティア，e-ラーニング，サービス・ラーニング，コミュニティー・サービス，看護学生

Ⅰ．はじめに

日本において，大学でのボランティア教育は，1990年のボランティア宣言や1995年の阪神・淡路大震災を契機に活発化したボランティア活動を背景に，重要視されてきていると言われている（佐々木，2003）。佐々木（2003）は，阪神・淡路大震災で，延べ150万人のボランティアが働き，内40％は大学生であったと報告している。研究者らの所属する教育研究機関においても，看護大学という特質も加わり，相当数の学生が，地域の健康・福祉領域でボランティア活動をしている。

ボランティア経験からの学習は，欧米では，すでに「サービス・ラーニング」として概念化とプログラム化されている。研究者らが行なった文献検討の結果，米国では看護の学部教育から大学院教育まで，「サービス・ラーニング」が教育方法として活用されている状況が明らかになった（松谷他，2004）。加えて，学生がボランティア活動を通して社会参加すると同時に，大学も社会のニーズを捉え取り組み，社会貢献する存在であることが求められていることを再認識した。

研究者らは，所属教育機関の学生が地域・社会で行なっているボランティア活動の学習ニーズと学習支援のあり

受付日2007年2月2日　受理日2007年4月27日
1）聖路加看護大学看護学部，2）聖隷クリストファー大学看護学部

方を平成14～16年度に研究した（香春他，2005）。この研究で，看護学生が様々な健康・福祉関連のボランティア活動を行なっており，同時に活動からの学びをさらに広げ・深めたいと考えていることが明らかになった。この学習ニーズ調査結果に基づき，学生がボランティアについて学び，ボランティア経験からさらに一市民として，また看護学生としての学びを深めることができる系統的学習支援プログラムの指針を提言した。

この先行研究を基に，平成17年度から大学が地域に貢献する教育活動として，Webを使ったe-ラーニングでの系統的ボランティア学習支援プログラムの開発と評価の研究を開始した。平成19年1月に，Web上のボランティア学習支援プログラムは，Web開発専門の会社とボランティア学生の協力で図1に示す初期画面から入り試用できる段階となった。

図1　プログラムの初期画面

本研究の全体目的は，看護学士課程の学生が都市部の地域で，一市民あるいは看護学生として，ボランティアについて学び，ボランティア活動に参加し，さらに，健康領域のボランティア活動の経験を学びに発展させることのできるWeb上の学習プログラム，『ヘルスボランティア・コミュニティー・e-センター』を開発し，プログラムを，学生の使いやすさ，学習成果の満足度や，教員・ボランティア受け入れ者の使用満足度の点から評価することである。本稿では，平成17年度から18年度に進めてきた『ヘルスボランティア・コミュニティー・e-センター』の開発過程について報告する。

Ⅱ．用語の定義

本研究で使用する主要な用語を下記のように定義し，研究を進めた。

① ヘルスボランティアとは，地域社会でのボランティア活動の一領域であり，健康・医療領域のニーズに応える自主的な活動で，疾病からの回復，健康の維持・増進，災害援助を目的とする大学内・外で行われている活動である。

② ヘルスボランティア学習支援プログラムとは，看護学生がすでに，大学進学までに養ってきたボランティア・マインドを基に，健康・医療・福祉領域での地域社会ニーズを敏感に把握し，一市民として，また，看護学生として活動し，その経験からの学びを支援するプログラムである。

③ サービス・ラーニングとは，このボランティアについての学習から，ボランティア活動の経験を通じての学びとすることを含み，大学が単位として認定する学びをいう。ここでは，研究段階で，大学としての制度が存在しないため，単位認定の有無は問題とせず，ボランティア活動を通して学習する支援のある学習活動である。

Ⅲ．研究方法

Web上の系統的ボランティア学習プログラム開発自体が新たな試みであり，かつ社会ニーズに応えるボランティア活動とその経験を学びにするための学習環境の改善を目指す，研究者，学生，プログラム専門業者との，ダイナミックな実践研究であるため，アクション・リサーチ（Morton-Cooper, 2000）の研究手法を参考にした。

研究倫理的配慮として，学生から教育プログラムのモニター等として協力を得る場合は，研究協力のお願いを掲示し，公募した。お願いの文中には，自由意志での参加，学業とは関係しないこと，及び，協力の中止を保証することを明記し，口頭でも説明した。タイでの学部生の実習や，パキスタンでの大学院院生の演習時に行なったリフレクションの記録形式のニーズ調査時には，同意書に署名をしてもらった。また，データ段階で匿名とし，データの管理は施錠のできる場所で保管した。年度毎に聖路加看護大学研究倫理審査委員会で承認を得た。

Ⅳ．開発過程の各段階

平成17年から18年の開発プロセスを大別すると3段階に区分できる。第1段階は，新たに参加した研究者らと，ヘルス・ボランティアの概念と学習支援の範疇を明確化し，Webの全体計画準備の段階であった。第2段階は，ボランティアに興味をもち，活動してみたいと考えている一般学生を対象とした「ボランティア」に関す

る理解学習を支援し，活動への動機づけを促すe-ラーニング・コンテンツ作成段階であった。そして，第3段階は，ボランティア学生で，会員登録をした学生へのWebを使用しての「サービス・ラーニング」支援開発段階であった。このサイト上で，学生がボランティア活動を記述し，さらに，振り返り・洞察し，自ら学びとる支援をするサイトの構築段階であった。これらの各開発段階を以下記述する。

1．Webの全体設計準備段階

Webの全体設計準備をする段階では，まず，研究者間の「ボランティア」の本質と,「サービス・ラーニング」の概念の理解を共有することから開始した。この文献検討は，平成17年6月から3ヶ月をかけて行なった。「ボランティア」,「サービス・ラーニング」に関する文献検討を行い，分担者会議で議論を繰り返した。

文献検討の結果，研究者らは,「ボランティア」の定義は，未だ多くの議論がなされている概念であることを確認した。研究者らは諸定義の中で，高萩（1996）の定義,「自発的な意志に基づき他人や社会に貢献すること」,と基本的な要素,『自主性（自由意志性)』,『無給（無償性)』,『公益性（公共性)』,『創造性（先駆性)』に準拠した。しかしながら，研究者らは，森（2003）が述べる「ボランティアが,歴史的に,行政（体制）の『カウンター・カルチャー（拮抗文化)』として存在してきた」との指摘に注目した。今日，行政が地域でボランティア活動を推進しており，本来のボランティアの自主性の尊重が損なわれる危険性があるという指摘を踏まえておく必要があるという共通理解をした。また，ボランティアが，単に公的サービスでの安上がりなサービス提供者としてのボランティアにならないよう留意することも確認した。研究者らは，社会のサービス・ニーズを批判的に吟味し，自らの地域・社会の発展を志向する側面に注目することを，研究の前提に置くこととした。この段階で整理した概念は，一般サイトの「ボランティアとは」の定義のコンテンツに反映させた。

2.「ボランティア」の知識提供のe-ラーニングのデザインと学習コンテンツ開発段階

平成17年度の9月から，第2段階であるプログラムデザインと学習コンテンツ作成に移行した。学習コンテンツ作成は，研究者らの先行研究（香春他，2005）から導いたヘルスボランティア・ガイドのプログラム指針を再検討し用い，e-ラーニング・プログラムとしてデザインした。この段階から，研究チーム構成を広げ，コンピューターソフト開発会社の職員を研究協力者として加え，コンテンツ作成準備を行なった。

1）学習コンテンツの再編成

作成基盤とした「ヘルスボランティアガイドプログラム」は,Ⅲレベル構成のプログラム：Ⅰヘルスボランティア出会いプログラム；Ⅱ，ヘルスボランティアを始めるための準備プログラム，ⅰ）入門コース，とⅱ）領域別知識と技術コース；そしてⅢ，ボランティア相互支援プログラムであった。

e-ラーニングでは，レベルⅠの出会いと，レベルⅡの始めるための準備，を知識学習プログラムと考え，一般サイト上に作成する計画をした。レベルⅢのボランティア相互支援は，ボランティア学生の「サービス・ラーニング」サイトとした。

2）一般サイトの開発

一般サイト開発の原則として，一般に公開し，地域の人々,特に若い人々が利用できるよう開発した。したがっ

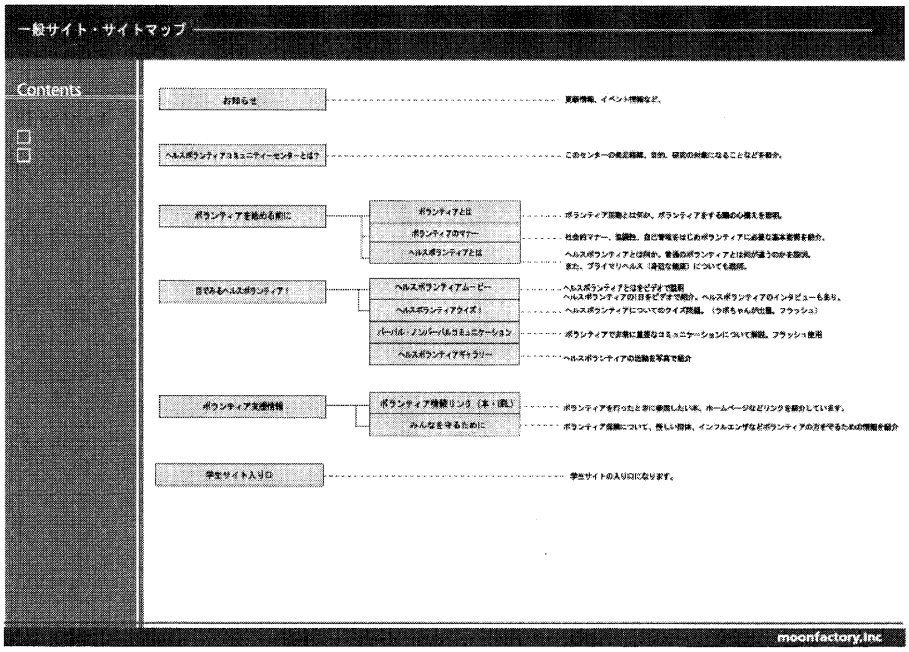

図2　一般サイト・コンテンツ

図３　サービスラーニング・サイト

て，コンテンツ作成の原則は，自己学習用に，イラストが可愛く興味を引いて，理解しやすい内容にすることであった。開発したコンテンツは学生によるモニタリングを受け，その意見を参考に開発した。

コンテンツは，研究者らが抽出した学習コンテンツに加えて，既存のボランティアに関するテキスト情報からe-ラーニングでの学習コンテンツ概要を作成した。そして，e-ラーニングのシナリオ作成，オーサリング，システム作成の過程を経た。コンテンツはそれぞれ研究協力者が分担して作成した。その後，コンピューターソフト開発会社に依頼し，図２に示す一般サイトのサイトマップを完成させた。

一般サイトのコンテンツは，(1)「お知らせ」，(2)「ヘルスボランティア・コミュニティー・e-センターとは」，(3)「ボランティアを始める前に」，(4)「ヘルスボランティアとは」，(5)「ボランティア支援情報」，(6)「会員（登録学生）サイト入り口」で構成した。

(3) の「ボランティアを始める前に」，のサブコンテンツはさらに，a.「ボランティアを始める前の心構え」，b.「ボランティアを行う際の基本姿勢」，c.「コミュニケーションについて」，により構成した。

(4)「ヘルス・ボランティアとは」，のサブコンテンツは，a.「ヘルス・ボランティアは何が違うの？」，b.「インターラクティブにヘルス・ボランティアを知ろう！」，c.「ヘルス・ボランティアとしての心構えのＱ＆Ａ」，そして，d.「あなたの身近な健康について」，によって構成した。

３．ボランティア学生の「サービス・ラーニング」サイトの開発

１）サイトデザイン上の考慮点

この「サービス・ラーニング」サイトをデザインするに際して，いくつかの考慮点があった。第１に，学生の中でも，ボランティアの考え方は様々であり，全てのボランティア学生が「サービス・ラーニング」（公的教育）を希望しないことが考えられた。現段階では，研究者の所属大学では，「サービス・ラーニング」の制度はない。したがって，ボランティア学生の中で，このサイト利用を希望する学生が会員登録し利用者となることを前提と

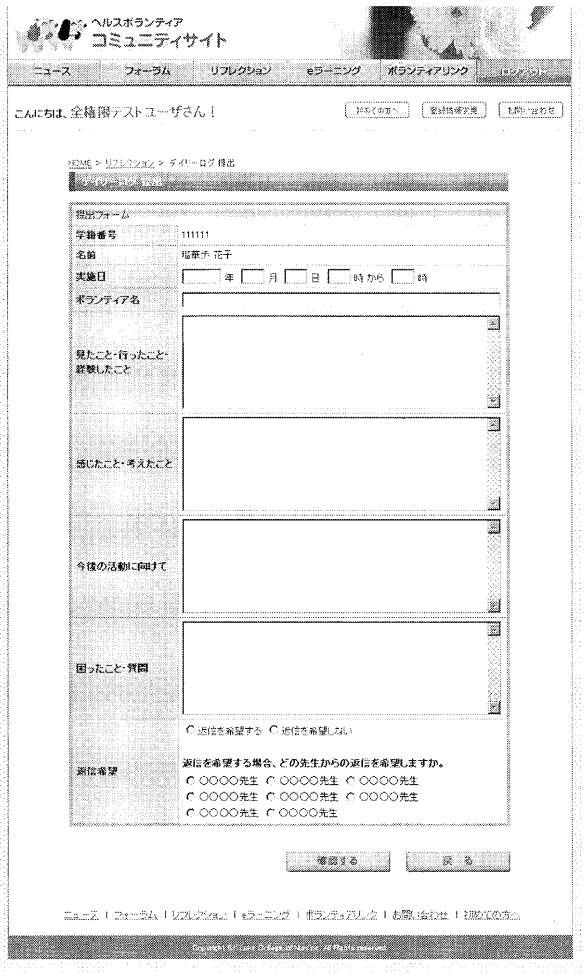

図4　リフレクション様式

してデザインした。第2に，本サイトが試行段階で教育的効果の検証がこれからであることに加え，質問を受けるチューターが研究分担者に限られるので，このサイトを利用できる学生の条件を研究者が所属する教育機関の学生に限った。

2）サイトの目的と構成

このサイトの目的は学生がボランティアの経験から学習するための支援であり，サイトの構成を（図3参照），a.登録している学生と教員が共有すべき最新情報（ニュース），b.焦点化したテーマについてディスカッションするフォーラム，c.各ボランティア学生が自らの活動を振り返る（リフレクション）記録とチューターへの質問や相談などのコミュニケーション，そして，d.コミュニケーションのとり方などの必要な知識学習のためのe-ラーニング，e.外部のボランティア関連Webへのリンク，とした。

3）リフレクションのデザイン

経験からの学習で重要なリフレクションのデザインは，海外ボランティア活動に参加した学部学生と修士課程の院生に実習記録を基に試作した用紙を使用してもらい，使いやすさの意見を参考に作成した。修士課程の院生2名は，パキスタン北部地域でヘルスワーカートレーニングに参与した。院生は毎日のリフレクション記録の意義を認めながらも，用紙にある枠は自由な思考を妨げるので枠は不要であると述べた。学部学生の8名は，タイのバンコクでの9日間の研修の後，3日間，バンコク中心部地域の小学校でのスクールナース活動，在宅ケア，デング熱キャンペーン，ナースクリニックに参加した。試作用紙の使い勝手について，活動終了後のグループで話し合った。学部生は，試作用紙が実習時の様式と類似するので，使いやすいとの意見が多かった。最終のリフレクションのデザインは，活用するのは多くが学部学生であると考えられるので，学部生の意見を中心に修正を加え，図4に示すリフレクション様式に作成した。

V．今後の短期と長期の評価に向けて

今後2年間の本Web開発と短期評価の具体的指標は，4点あると考えている。第1に，どのくらいの学生や一般市民の方が，一般サイトにアクセスし，ボランティアに関する情報を学習していただけるかである。第2に，アクセスした方の中で，どのくらいの方がボランティアについて知り，考え，そして，活動に参加していただけるかである。第3の指標は，現在ボランティア活動を行なっている学生が，学生サイトに登録し，Web上でボランティア活動のリフレクションを作成し，自分と向き合い，そこでの自分の疑問を友人や教員と共有し，コミュニケーションがどの程度なされるかである。第4に，教員やボランティア受け入れ者の使用満足度や負担がどのようなものであったかである。

このWebでのコミュニケーションが活発になることにより，さらに，対人のコミュニティーが形成され，大学内外のコミュニティーのネットワークが密になり，地域活動に反映されることを期待している。

長期的な成果は，高等教育機関のユニバーサルな教育目的の一つである，「良き市民の育成」及び，「専門職」の能力基盤の「社会的責任の感性の形成」にどのように寄与できるかが視点となる。

本研究の開発過程で，米国の2大学の「サービス・ラーニングセンター」と「パブリック・サービスセンター」の情報（田代他，2007）を参考にして開発してきた。両大学とも，高等教育機関として各々の社会的文脈で，地域を基盤とし，地域参加を理念として掲げ，その理念の実現に向かってプログラムを運用している。本研究者の所属する教育研究機関も，日本の高齢少子社会における様々な健康課題に対して，地域を基盤とした市民主導型の健康生成を目指している。この地域の健康課題を学生・大学が地域の人々とともに改善してゆける力を養うための教育資源として開発している。

今後，まずは2年間，作成したWebサイトがボランティア経験から学習することの助けになったかどうかの評価と課題の改善を重ねてゆきたい。

Ⅵ. おわりに

開発の２年間の過程から，研究者が学んだことは，Web 上での学習支援プログラムの開発には，多くの研究協力者との協働作業が何より重要であるということである。Web 上での学習は自己学習であるが，自己洞察による学習に必要なコミュニケーションを補助してくれる手段として，ボランティア活動を通して，良き市民の学びが広がる学習資源となるであろうと期待している。今後２年間，Web を使ったボランティア学習支援の成果を探索しつつ，活用者の声を聞きながら，Web の一般サイトとヘルスボランティア・コミュニティー・e-センターを使いやすい，そして学習を支援できるサイトして改善を進めてゆく計画である。

謝辞：本研究は，平成 17 年～ 18 年度の科学研究費助成金により行なった。多くの研究協力者に感謝いたします。渡部通子，高木佳子，山賀正康（株式会社ムーンファクトリー）鈴木良美，（聖路加看護大学大学院博士課程），玉那覇慈乃，渡邊碧 （聖路加看護大学看護学部）五味麻美（同大学院修士課程），竹内泉，吉川久美子（聖路加国際病院），
Pununda Priyatrauk, & Dr. Wilaipunsomboontanont（マヒドン大学医学部看護学科），Dr. David Johnson, Mr. Pervez Ghouri,（Mission Hospital, Peshawar, Pakistan）

引用文献

香春知永，田代順子，及川郁子，他(2005)．ヘルスボランティア活動をしている看護学生の学習ニーズと学習支援のあり方．聖路加看護学会誌．19(1). 11-17.

松谷美和子，田代順子，香春知永，他(2004)．看護教育法としての「サービス・ラーニング」：実践研究文献レビュー．聖路加看護大学紀要．第30巻．31-38.

森秀樹(2003)．第2章カウンター・カルチャーとしてのボランティア．佐々木正道編著．大学生とボランティアに関する実証的研究．ミネルヴァ書房．23-98.

Morton-Cooper, Alison. (2000). Action Research in Health Care. 岡本玲子，鳩野洋子，関戸好子訳(2005). ヘルスケアに活かすアクションリサーチ．医学書院.

佐々木正道(2003)．大学生とボランティアに関する実証的研究．i．ミネルヴァ書房.

高萩盾男(1996)．高齢社会とボランティアリズム．高橋勇悦・高萩盾男編．高齢化とボランティア社会．6-7．弘文堂.

田代順子，大森純子，平林優子，麻原きよみ，他(2007). 米国におけるサービス・ラーニング(地域参加型教育)の理念と取り組み―ウィスコンシン大学とワシントン大学の視察調査とワークショップ報告―．聖路加看護大学紀要．33. 48.

英文抄録

Development of an e-Learning Program for the Community and Supporting Student Health Volunteer: Process of the Development

Junko Tashiro, Yasuko Nagamatsu, Junko Omori, Michiko Hishinuma
Miwako Matsutani, Ikuko Oikawa, Kiyomi Asahara, Yuko Hirabayashi
(St. Luke's College of Nursing, Department of Nursing)
Masako Sakai
(Seirei University. Department of Nursing)

After the big earthquake in Kansai area in 1995, volunteer activities became popular in Japan. Currently, many nursing students are working in the area of health or community service as volunteers. During the period of FY 2002-2004, we investigated educational needs of nursing student volunteers working in health or community service and then designed an educational program for them. From FY 2005, we had worked on developing an e-learning educational program, and we completed it in January 2007. The purpose of this study is to describe the process of developing the educational program, which was designed primarily for first and second year nursing students, but also meets the needs of others interested in volunteer work. We used an action research approach to develop the e-learning program. The process was classified into three steps. First, we began a periodic meeting to discuss the design of our website and its contents. Then we signed a contract with website developing experts and recruited nursing volunteer students to be participants in the study. As a result of our process, the web experts created a draft website with two layers: one general site for public and one for nursing student volunteers who are provided secured access to it. The general website provides information about being a volunteer, including its mission, roles, etc. The student site has e-mail for students to communicate with each other and with supporting faculty members who are resources for advice. In the future, we must evaluate the effectiveness of our e-learning program in helping students learn community responsibility as citizens and also as nursing students.

Key words: health volunteer, e-learning, service learning, community service, nursing student